

ソロモン陸戦隊

長崎県諫早市 福本 一人

昭和18年6月30日午前4時42分、敵駆逐艦に護衛された輸送船団が突如ソロモン群島表ムンダの前方海上に出現したのである（監視哨からの報告によると駆逐艦5、輸送船6、大発120）。予期せぬことではなかったが敵の上陸は必至となった。ガダルカナルの二の舞か、陸戦隊員の胸中には一様に言い知れぬ興奮と不安が交錯した。いよいよ覚悟を決める時が来たようだ。

直ちに大本营、連合艦隊、南東方面艦隊、八艦隊旗艦と全軍にキン電（海軍作戦特別緊急電報）の「駆逐艦ヲ伴フ敵輸送船団見上」を発信した。

それから一月余りの悪戦苦闘が続いて、陸戦隊員は肉体的、精神的な過度の苦しみと、飢えと疲労とアメーバー性赤痢（血便）や熱帯性マラリアや栄養失調で戦いに疲れ、落武者か敗走兵のような姿で戦いを続けたが、間断なき敵の物量の前にはなす術もなかった。

来る日も来る日も対岸からの4000発の陸上砲弾と艦砲射撃と100機に近い敵機の爆弾の雨を浴びて、逃げ惑う日々であった。

敵機は上空を旋回し、編隊を解きながら金剛山上の司令部を攻撃する。キーンと唸りを上げて突っ込んでくる艦上爆撃機の急降下の直撃に近い爆撃に、胸えぐらるる思いでこれが最期かと防空電信室兼用の司令部防空壕で伏せていた。その中には司令官や南東支隊長佐々木登陸軍少将の顔も見えた。

一発毎に次は直撃かとひやりと胸を刺す。両手の親指で両方の耳の穴を塞ぎ、両手で目と鼻を覆い、爆風による鼓膜の防御と眼球の保護と窒息死を避け恐怖を避けた。これ程の至近弾を喰らったのは初めてである。

やっと危険を脱して壕を出ると、付近は爆弾特有の硫黄臭い硝煙が立ち込めていて、鼻を突く7~8mの至近距離に50番（海軍用語、500kg爆弾）があちこちに直径10m程の大きな穴を珊瑚礁の岩盤にあけている。

司令部も破壊され、ジャングルの大木がへし折れ吹きとばされて、広々とした青天井がのぞいていた（戦闘記録によると昭和18年7月25日1420、敵機52機の攻撃を受け司令部破壊とある）。

戦死者も出た。傷ついた戦友の呻き声が聞こえてくる。血なまぐさい風が金剛山上に漂い、戦場の非情を歎ずる全山の将兵の声なき声が流れる。時限爆弾で助かったが、運が悪ければ金剛山上の露と消え、ソロモンの密林に屍を曝す運命となっていたらう。

本島を守備する海軍の第8連合特別陸戦隊（略称8連特）は、呉鎮守府第6特別陸戦隊（呉6特）と横須賀鎮守府第7特別陸戦隊（横7特）からなり、司令官は太田実海軍少将であった。陸上戦闘を陸軍で学び、海軍では陸戦の神といわれた人で、編成時の昭和18年5月1日8連特司令官、20年1月24日沖縄方面海軍根拠地隊司令官、6月13日沖縄小禄の海軍司令部

壕で戦死（自刃）、任中將功一級、『沖縄県民欺ク戦ヘリ』の電文を残した丸顔の好々爺だった。

直撃を受けた壕では爆弾の風圧と破片で顔がペシャンコに変形して目玉が露出した者、片手片足を失った隊員がころがっている。これが今迄生きていた人間なのかと目をそむける悲惨な姿に変わり果てていた。

劣勢の戦場の惨めさは哀れであった。そこに傷つき倒れ血を流して死んでいく戦友を見ても施す術もなく、感傷の涌く余裕もなかった。それが顔見知りであり身近にいた者であれば、『こいつもどうとう死んだか。次は俺の番だろう』と空しさだけが私の胸中を駆け抜けていく。地獄の戦場にヒューマニズムは存在しない。あるものは生か死か、殺すか殺されるかである。

所詮人間とは弱いものだ。俺は人より卑怯者ではないのかと考えるが、しかしそれは皆必至に堪えているのであった。多少の差はあったにしても、全部の兵が口には出さないが生きていたいと考えているに違いなかった。

『明日は明日の風が吹く』とつぶやく投げやりと諦めで吐く言葉の裏側では、『この苦しい戦場から逃れたい。何のために自分達はこんなに苦しまねばならないのだろうか。悪いくじ運を引き当てたものだ』と考えるのである。

お互いが卑怯者になりたくない。軍人精神などが強く引きずって行く。『こんなにも堪え難い苦痛の毎日が続くのならば、いっそ早く戦死をしてしまった方がどれ程楽だろう』と何度考えたかわからないが、行く所迄行って、なるようになる迄生きてみようと思ひ直すのであった。

太陽が西に沈むと激しい戦いは止む。鬼が泣く戦場に夜が来て、そして夜明けがやってくる。夜明けが来ればまた新しい戦いが始まる。『西の海に沈んだ太陽がいつ迄も顔を出さないでくれたなら戦いは起こるまい。そして命を捨てることはあるまい』と考える。朝が来るのが恐かった。

南緯8度という名も知らないような遠い島に来て、ここが我が人生の墓場也という諦めの中でも、生きたいという欲望は捨て去ることができなかった。

太平洋戦争の最前線に来て、遥かなる祖国を、懐かしい故里を思い、そして『両親を一目でよいから見て死にたい』と考えるのである。そんな切ない思いを抱きながら、軍人の本分たる玉砕の道を求めて多くの戦友が死んで行ったのだろう。

太平洋戦争、それは歴史の中のほんの1ページとなってしまったが、戦争の実相や兵士の心理を知る者は少ない。戦争とは悲惨なものだ。私は死神に見放されて転進、敗戦、復員の道を辿り、祖国の土を踏んだ幸せな者だったが、戦後を見ずに蕾のままで散った多くの戦友がいたのだ。私は15志（昭和15年の海軍志願兵）の電信兵で、当時は第26航空戦隊司令部（在ブイン）のムンダ航空基地派遣員の前任者（暗号2名を含む総員6名）で、海軍水兵長（満年齢17歳）であった。

飛行場は集中砲火を浴びて8連特司令部と合流し、生死を共にすることになったのである。今は昔の遠い思い出となり、戦争を語ることも少ない。